

地域振興とオーセンティシティ

—天草南蛮文化を例にして—

小林 潔司

【天草と潜伏キリシタン】

第 42 回世界遺産委員会は、2018 年 6 月 30 日に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（長崎、熊本両県）の世界文化遺産への登録を決めた。江戸時代のキリスト教弾圧の中で信仰を続けた希少な宗教文化が評価された。潜伏キリシタン関連遺産は 12 の資産で構成され、1637 年の島原の乱で武装蜂起したキリシタンらが立てこもった「原城跡」（長崎県南島原市）、漁具や貝殻を祈りの対象に見立てるなど漁村特有の信仰形態が続いた「天草の崎津集落」（熊本県天草市）などが含まれている。

天草は、キリシタン殉教の島として知られる。南蛮文化の発祥地でもある。1566 年当時、天草 5 人衆（志岐、天草、大矢野、上津浦、栖本氏）の中の 1 人志岐氏が、ポルトガル人宣教師ルイス・デ・アルメイダを招いた。フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着してから 17 年後、天草にもキリスト教が伝来した。島民の殆どがキリシタンになったと言われる。天草氏の領内にはコレジョが置かれ、南蛮文化の中核として栄えることになる。巡察使ヴァリニアーノは日本を高く評価し、1582 年（天正 15 年）、天正遣欧少年使節団をローマに派遣した。少年使節団が、西欧文化やキリスト教を学んだ場所。それが、天草に設けられたコレジョであったと言われる。

天正遣欧少年使節団は、ヨーロッパ各地の教会を視察してまわり、リスボンでは西欧の高度な印刷技術を学んだ。4 人の持ち返った南蛮文化が天草学林で実を結ぶことになる。次第に激しくなるキリシタン迫害の中、家康の禁教令（1612 年）と天草の乱（1637 年）により、キリシタンに関係の遺産はことごとく破壊された。天草の地で咲いた南蛮文化であるが、現存するものはほとんどない。

天正遣欧少年使節団の存在は歴史の中で忘れ去られた。明治 4 年、岩倉使節団が欧州視察に行った折、はるか昔に少年使節団がローマ法王をはじめ、スペイン国王フェリペ 2 世、フィレンツェのメディチ家の熱狂的とも言える大歓迎を受けていたことを知り、驚いたと言われる。ローマ教皇グレゴリウス 13 世は、はるか東方の異教の国からはるばるやってきたこと少年たちを抱きしめて、涙を流しながら祝福したという。禁教下では、少年使節団のことを記録する術がなく、やがて少年使節団のことは、地方の言い伝えとして埋もれてしまった。今は忘れ去れた歴史があるという歴史が、また忘れ去られている。

【観光オーセンティシティ】

地方小都市の活性化を实践する上で、観光振興は重要な役割を果たす。折しも、崎津集落の宗教文化が世界遺産の指定を受けた。かつて天草の地で発祥した「天草南蛮文化というべ

きもの」を柱とした観光が、果たして可能かどうかを考えてみたい。

「観光」の語源は『易経』の「国の光を觀る。もって王に賓たるに利し」にある。「天草南蛮文化は天草の光になりえるのか？」という問いが生まれる。そもそも、天草南蛮文化は天草の風土の総体の中に曖昧なまま認識されている 1 つのイメージにすぎず、世界遺産審査において問われるオーセンティシティ (authenticity, 真正性, 信憑性) の条件を満足するものではない。とはいえ、「天草南蛮文化のオーセンティシティ (『ほんまもの』であるかどうか) の根拠をどこに求めればいいのか？」に答えなければならない。

さらにいえば、それは、「確固たる歴史的証拠 (客観的なオーセンティシティ) を持たない多くの地方都市において、それでもなお歴史的物語を資源として観光を推進せざるを得ない地域における観光のオーセンティシティとは何か？」という問いでもある。客観的オーセンティシティが検証できないとすれば、断片的に残っている客観的証拠に最大限の敬意を払いつつ、ホストとしての地域とゲストとしての訪問客の価値共創の結果としての主観的なオーセンティシティを作り上げるしかない。このようなオーセンティシティを創発的オーセンティシティ (emergent authenticity) と呼ぼう (Cohen, 1988)。

創発的オーセンティシティは、その地域で受け入れられ、その地域の価値を反映しているという正統性 (legitimacy) と、他者のまなざしにおいても正統性を持つものでなければならない。とりわけ、グローバル化した社会では、世界史的視点からみた正統性が要求される。創発的オーセンティシティによる地域観光は、多様な正統性の問いに誠実に答えていくという謙虚さが必要となる。

【南蛮文化の文化的正統性】

わが国で言う南蛮文化とは、西洋人がもたらした多様な外国文化の総称であり、その中には、西洋起源ではなく、アメリカやインド、東南アジアや中国から新たにもたらされた文物全てが含まれていた。当時の日本社会に、新来の外国文化への憧れと愛着が生まれた。その 1 つがプリント地のインド更紗に代表される衣料であり、いま 1 つは食文化である。しかし、鉄砲等若干の文物を除き、西洋の技術、宗教・哲学もまた、禁止措置もあり直接的には日本の文化に影響を与えなかったといわれる。しかし、それでは、なぜ当時の日本人が南蛮文化を積極的に受容し、後のキリスト教禁教令や「鎖国」の実現によっても、南蛮文化・西洋文化への関心を失わなかったのか、という疑問が生まれる。

古くは、日本人の仏教的宇宙観は中国・天竺・日本により構成された。世界の中心は仏教的観念である天竺であり、現実的な世界の中心は中国であった。しかし、南蛮貿易を通じて、中国文化とは異質な論理と技術で組み立てられた南蛮文化が存在することを知った。この意義は大きい。世界観の転換である。日本人にとっての南蛮文化とは、世界の中心としてこれまで受容してきた中国文化を相対化するものであり、仏教的世界観とは異なった自国の文化を形成するきっかけとなった。南蛮文化の正統性は、日本人の伝統的宇宙観の相対化を通じた世界観の変化・拡大にあると思う。

しかし、それはあくまでも、日本から見た一方的な正統性に過ぎない。西欧、そして東アジア、東南アジアの文化が日本のコンテキストの中で受容された結果としての「文化的正統性」が「南蛮」であるとして、その正統性を世界史的視座の中でどう位置付ければいいのかという問いに答えていない。「南蛮」とは、イエズス会、あるいはイエズス会を生み出したバスク文化、さらには西洋文化の日本におけるローカル化にすぎないのだろうか。世界からみた南蛮文化という視点は、「日本文化にとって南蛮文化とは何か」に関する議論よりもさらに難しい。

わが国では、コロンブスによるアメリカ発見を教えるが、ポルトガルによる日本発見とは教えない。不思議なことに世界関係を観る視座が非対称なのである。西欧人が日本を発見したのは、ポルトガル船が難破して種子島にたどり着いた 1543 年である。1549 年にフランチェスコ・サヴィエルが長崎に到着しキリスト教の布教を始め、100 万人にも至る日本人が改宗し、島原の乱で 1 つの終止符を打つこととなる。この「キリスト教の時代」は多くの殉教者を虐殺し、外国人を日本から追放することで最期を迎える悲劇の時代だった。しかし、わずか半世紀という短い期間に、日本と西洋の文化的な混合から「南蛮文化」という新しいフォームで表現された文化がつくられた。それは同時に、日本文化を西欧に知らしめた日本史上燦然と輝く大交流時代だった。では、この相互作用は世界史的にどのような意義があるのか、そこからどのような南蛮文化を軸とした地域創生の物語が描かれるのか。

かつて、ナポレオンは「ピレネーの向うはアフリカである」と言ったように、西欧は極めて多様な社会であった。ヴァリニャーノ自身が書いた 4000 通を超える書簡を通じて、西欧社会は日本社会という極めて異質な社会の存在を知った。2 世紀を越える鎖国の時代にも、西欧社会は極東の「日出る国」という異質性に注視し続けた。現代社会は、「パックスアメリカーナ」、「パックスシニカ」というような単一ヘゲモニーで支配されるものではない。また、フランシス・フクヤマが「歴史の終わり」で述べたように、文化のグローバリゼーションの対立により現代史のダイナミズムが支配されるわけでもない。むしろ、地域文化が異なる文化と共生を図りながら、地域毎に深く根を降ろしていく時代である。西欧文化が、南蛮文化という 1 つの正統的文化として日本社会に根付いた。南蛮文化とは、このような文化的共生を成功させた 1 つの模範であると思う。1 つは「Inculturation」すなわち、他者の文化を理解し受容したこと、いま 1 つは「異なることは悪いことではない」ことを理解し実践したことの模範である。このことは大航海時代における西欧文化のローカリゼーションの成功事例であるが、異文化コミュニケーションを通じた文化共生という現代的な意義も持ち得ている。

【創発的オーセンティシティ：】観光オーセンティシティとして、1) 客観的オーセンティシティ、2) 構成的オーセンティシティ、3) 実存的オーセンティシティという 3 つの立場があるとされる。創発オーセンティシティは、これら 3 つのオーセンティシティとかかわりがある (Cohen, 1988)。

客観的オーセンティシティ論は、観光対象に内在する客観的特性としてオーセンティシティを捉えている。オーセンティシティは、観光対象に内在する固有の特性であり、客観的な基準で測定できると考える。世界遺産の審査では、客観的オーセンティシティの条件（2015年制定）として、1)形状、意匠、2)材料、材質、3)用途、機能、4)伝統、技能、管理体制、5)位置、セッティング、6)言語その他の無形遺産、7)精神、感性、8)その他の内部要素、外部要素の8つの属性を示している。

構成的オーセンティシティ論は、観光対象及び観光者の意識の中で生成されるリアリティとしてのオーセンティシティに着目する。オーセンティシティは常に変化し、かつ構築可能な概念として捉える。構成的オーセンティシティ論は、オーセンティシティを観光対象の客観的特性に限定せず、構成的かつ交渉可能な概念にまで拡張した。この立場に立てば、観光地の商業化は必ずしもオーセンティシティの消失を意味するのではなく、新たにオーセンティシティを構成するという意義がある。しかし、いかにして観光の商業化がオーセンティシティを確保し得るかについては十分に検討されていない。

実存的オーセンティシティ論は、それぞれの個人において、自らが経験した観光対象が真実であるという実感を創り出していることを主張し、ポストモダンの観光体験のあり方に大きな影響を及ぼした。一方、この考え方は、観光対象自体の役割を軽視したため、観光対象の固有の性質を活かしながら観光事業のあり方やその持続的発展を議論する上では限界を抱えている。

観光におけるオーセンティシティ概念は、本物であるか偽物であるかという二元論には還元できない多義的な意味を持っている。構成主義と実存主義の立場は、観光におけるオーセンティシティの根拠を観光客の個人的経験に置いている。それは過去の遺物だけでなく、将来の可能性にも着目している。例えば、ディズニーランドを考えよう。そこでは、すべてがファンタジーであり、オリジナルな物語が単なるコピーを乗り越えて、新しい意味が作り出されている。ディズニーランドが時代を経て現代アメリカの重要な要素となり、やがて歴史家・民族史家によって「真正なアメリカの伝統」と捉えられるまで発展するだろう。このように時代の中で変化し、新たに作り出されるオーセンティシティを創発的オーセンティシティと呼ぶ。客観的オーセンティシティを持ち得ない地域が、新たな観光オーセンティシティを持ち得るとすれば、創発的オーセンティシティに頼らざるを得ないのである。

一方で、そうした創発的オーセンティシティを支える原動力として、観光対象に内在する客観的特性が存在することも否定できない。観光対象に関わる客観的特性は、観光ビジネスの持続性を維持する上で重要な役割を持つ。観光客が個人的なオーセンティシティを経験する上で、観光対象の中の客観的特性が不可欠であり、その実存的な意義が観光客の中で定着することによって、持続的な地域の観光振興に繋がる。観光の創発的オーセンティシティを築き上げるためには、観光対象の正統性と残存する歴史的な客観的特性を尊重しつつ、そこでの観光客の実存経験と関わりながら、オーセンティシティを築き上げるプロセスが必要となる。しかし、創発的オーセンティシティの条件を、先決的に決定することは非常に難し

い。天草南蛮文化の例では、「ほんもの」の南蛮文化を満足するための条件を、あらかじめ用意することは、ほとんど不可能なのである。そもそも客観的オーセンティシティの証拠がほとんど残存していない中で、「ほんもの」のための条件を、先決的にリストアップできないのである。

かつて、レヴィ=ストロース(1972)は、著書「構造人類学」の中で、人類学の貢献は「真正性の水準」による2つの社会様態の区別を導入した点にあると述べた。生活が織りなされている現場に足場をおく人類学者なら、非真正な(にせもの)社会に包摂されながらも人々が営んでいる真正な(ほんもの)社会生活をそこに見出すことができる。「ほんもの」を定義することは困難であるが、「にせもの」を見出すことはできる。「にせもの」があるから、「ほんもの」が理解できる。創発的オーセンティシティを構成する現場においては、さまざまな試みが自由になされることが望ましい。その中で、「これはにせものである(これをやってはいけない)」というルールを蓄積していく。多様な試行錯誤を通じて、「やってはいけないこと」というネガティブ・リストを蓄積し、それを共有化していく。このような内省の過程の中で、逆に、築こうとしている創発的オーセンティシティの意味が次第にはっきりしてくる。それは、地域振興のPDCAサイクルである。非オーセンティシティ的要素(にせものの要素)を発見し、それを排除しながら、地域における自由で多様な試みを通じて、螺旋的にスパイラル・アップしながら創発的オーセンティシティを構築していく。それが、地域に期待される観光振興のあり様であると思う。

【観光舞台としてのプラットフォーム】

近年、DMO(Destination Management Organization)に代表されるように、観光を軸とした地域振興を行うために地域のさまざまなステークホルダーの行動をコーディネートし、地域全体の魅力形成を目的としたプラットフォームが設立されるようになってきた。このようなプラットフォームは、先述した螺旋的PDCAサイクルを動かして、創発的オーセンティシティを築くために重要な役割を果たすことになる。このようなプラットフォームが創発的オーセンティシティを築くための方法論として、マック・キャネル(MacCannell, 1973)が提唱した「舞台化されたオーセンティシティ」という考え方に着目したい。舞台は表舞台と裏舞台で構成される。表舞台は、観光地と観光客が出会う場所であり、裏舞台は地元の人々が観光客向けのパフォーマンスを準備するための場所である。

創発的オーセンティシティを進める上で、その舞台裏で観光開発の根拠となる基本的なコンセプトを設定することがまず重要な課題となる。基本コンセプトは、観光開発を行う正統性の根拠に他ならない。基本コンセプトの設定は、観光オーセンティシティの商品化と舞台設定を行うための第一歩と言える。具体的には、専門家の助言を得ながら、観光振興に関わるステークホルダーが観光振興の基本コンセプトを定義し、その上で創発的オーセンティシティの構築について合意する。専門家とは、歴史家、文化研究学者、各領域の専門業者、ビジネスに関する有識者等が該当する。地域内で基本コンセプトの設定と共通化を図る上

では、様々な関係主体による議論の場（プラットフォーム）を設けることが必要である。また、創発的オーセンティシティに対する愛着や誇りを涵養し、地域全体の財産として保護していく意識を育むことが重要である。さらに、地域外の潜在観光客に、基本コンセプトに関する情報を発信し、認知度を高める努力が求められる。

表舞台では、どの程度、観光客が創発的オーセンティシティに対する関心を持つかが問われる。観光振興に関わる事業者の重要な役割は、表舞台のパフォーマンスを通して、観光客に体験に基づく実存的オーセンティシティを感じ取ってもらうことである。その時、表舞台のパフォーマンスから「にせもの」を排除するために、以下の点に配慮することが必要となる。

- ・舞台上の観光対象が偽造されたり、誤りがあってはならないこと、
 - ・舞台上でのパフォーマンスが観光振興の基本的コンセプトと整合していること、
 - ・舞台上でのパフォーマンスが、過去の客観的要素と将来的な可能性の双方をバランスよく含んでいること、
 - ・観光ビジネス関係者だけではなく、地域文化に関わるすべてのステークホルダーの間で、共通の地域ブランドとして観光開発を進めていくこと、
- などがあげられる(馬ら, 2016)。

【天草南蛮文化による観光振興】

天草市では、AmaBiz という地域プラットフォームを立ち上げ、起業振興に向けた精力的な努力を続けている。筆者らは、天草市、AmaBiz と連携協定を結び、地域起業プラットフォームを立ち上げるべく起業塾を運営している。天草の崎津集落の世界遺産登録を契機に、天草市および起業塾の卒業生らが中心となって、天草南蛮文化を軸とする観光開発のための裏舞台設置の努力を行っている。その1つの試みとして、2015年11月、ポルトガル及びマカオの学者・専門家14名を招き、天草市で展開されている天草南蛮文化に関する創発的オーセンティシティの検証を行った。ポルトガルチームは、約1週間天草市に滞在し、潜伏キリシタンに関する博物館、南蛮文化をモチーフとした商



写真—1 ポルトガルチームによる天草南蛮文化の検証

品開発を行っている事業者、島内に点在する南蛮文化に関わる史跡を訪問し、行政や事業者、博物館関係者と検証結果に関して討論を行った。さらに、ポルトガルにある大学研究者と南蛮文化に関する国際ワークショップを数回にわたり開催するとともに、ノバ・リスボン大学のアレシャンドラ・クルベイロ准教授に天草市



写真—2 アレシャンドラ・クルベイロ先生、天草南蛮文化顧問就任

の顧問になっていただき、天草南蛮文化に関する創発的オーセンティシティ形成に関わる助言を頂いている。また、事業者グループは、独自にポルトガルを訪問し、ポルトガルチームとの交流を行っている。

ポルトガルチーム招聘の目的は、天草で芽生えつつある天草南蛮文化のオーセンティシティの検証である。天草南蛮文化の商品化も進みつつある。例えば、現存するインド更紗をモチーフとした天草更紗であり、ポルトガル由来のいちじくの実を用いた南蛮菓子などである。そもそも大航海時代の南蛮文化に関わる客観的オーセンティシティの要素は、ポルトガルやマカオにも残っていないのである。ポルトガルチームの検証結果は、天草南蛮文化の復興をめざす事業者にとって、極めて好意的であった。更紗であれ、南蛮菓子であれ、それが「商品として良いものであれば、やはり、商品として良いもの」なのである。将来の天草南蛮文化の要素としてふさわしいものであれば、創発的オーセンティシティを形づくる要素足りえるのである。しかし、ポルトガルチームは、多くの改善課題を検証結果として残していった。彼らが指摘した点は、キリスト教文化におけるカソリックとプロテスタントの混同、大航海時代における同時代的世界観に関する誤謬、潜伏キリシタンに関する解説の矛盾点である。これらの批判は、日本人の視点からは、なかなか気づくことが難しい内容であるが、グローバル化時代における創発的オーセンティシティを築くためには、排除すべき要素である。

天草南蛮文化の活性化の試みは緒についたばかりである。創発的オーセンティシティを担うべきプラットフォームも、いまだ確固たる姿が見えていないわけではない。しかし、まだ試行的な段階とはいえ、天草南蛮に関わる文化観光のオーセンティシティについて、1)外部リソースを活用してキリスト教関連施設のあり方や博物館の解説内容の混乱を克服し、展示内容を見直す、2)地域全体に対するカソリックや天草南蛮文化に関する知識を普及・啓発

する, 3) 観光施設における観光客の受け入れ体制を整える, といった具体的な修正方針が見出された意義は大きいと考える.

【参考文献】

- 1) Cohen, E.: “Authenticity and commoditization in tourism”, *Annals of Tourism Research*, Vol.15, No.3, pp.371-386, 1988.
- 2) ヴィットリオ・ヴォルピ「巡察師ヴァリニャーノと日本」, 一藝社, 2008.
- 3) レヴィ=ストロース, 川田順三他訳: 構造人類学, みすず書房, 1972.
- 4) MacCannell, D.: “Staged authenticity: arrangements of social space in tourist settings”, *American Journal of Sociology*, Vol.79, No.3, pp.589-603, 1973.
- 5) 馬夢妍, 羽鳥剛史, 小林潔司: 天草南蛮文化のオーセンティシティと観光開発, *グローバルビジネスジャーナル*, Vol.2, No.2, pp.31-42, 2016.